

## ルカによる福音書12章1-48節 「群衆と小さな群れ」

### 1A 人への恐れ 1-12

1B 神への恐れ 1-7

2B 聖霊による証言 8-12

### 2A 財産との関わり 13-48

1B 財産に対する心 13-34

1C 貪欲への警戒 13-21

2C 御国の生き方 22-34

1D 必要を知っておられる主 22-30

2D 財産による施し 31-34

2B 給仕の心 35-48

1C 目を覚ます 35-40

2C 忠実に仕える 41-48

## 本文

ルカによる福音書 12 章を開いてください。私たちは、12 章 1 節から 48 節まで一節ずつ読んでみたいと思います。49 節から最後までは、来週の午前礼拝でお話します。午前礼拝で、お話ししましたが、イエス様のところには群衆が増えてきています。イエス様は、そのことを喜ぶどころか、警戒しておられました。11 章 29 節に、「群衆の数が増えてくると、イエスは話し始められた。『この時代は悪い時代です。しるしを求めますが、しるしは与えられません。』」とされています。そして、群衆が増えて来るという流れは続きます。そしてその流れに対して、12 章でイエス様は警告をし続け、弟子として神の国の中に生きる道を教えられます。終わりの日における報いについても教えられます。ところで、終わりの日には、多くの人が「主よ、主よ」と言うけれども、「わたしはあなたを知らない」と言われるということが、マタイ 7 章でイエス様が言われていますし、人々が健全な教えに耐えられなくなって、耳に心地よい話を聞こうと作り話にそれていくような時代になるということが、テモテ第二 4 章に書いてあります。そのように、群衆が進んでいってしまう方向、いわゆる「人気がある」「多くの人が持ちあげている」という流れにある危険というものを、12 章でイエス様は語り始められます。

### 1A 人への恐れ 1-12

1B 神への恐れ 1-7

1 そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。2 おおわれているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずにすむものはありませ

ん。3 ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。

これら群衆の中に、パリサイ派がいたのですが、偽善というパン種が入っていました。それは、人々にはきよく見えるのですが、神にしか見えない隠れたところは、汚れていっぱいでした。人がたくさん集まると、それだけ良く見せようとする圧力がかかります。そして、人々は、よく見える人やよく見えるところに集まって、それを持ち上げます。しかし、終わりの日には、そうした隠れたところでやっていること、言っていることが明らかにされるのです。

ここで、暗闇で言ったことについて、具体的には、彼らが呟くようにして、「11:15 悪霊どものかしらベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」と言ったことです。それはおそらく、群衆の中で消えて行った小さな声だったのですが、イエス様はそれを大声で反論されました。

4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいけません。7 それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。

主は、とても愛情深い呼びかけ、「わたしの友」と言われています。主は、ご自身が十字架に付けられるように、弟子たちも迫害を受け、殉教することを知っておられました。そこで大きな問題は「人への恐れ」です。午前礼拝で、人への恐れが偽善を生むことを話しました。人にどう見られるのか？と恐れるからです。それで、外面を良くしようとするのがパリサイ派の教えであったからです。現に、ユダヤ主義という異端が初代教会を荒れ狂います。

そこで、恐れに対する処方箋は、「神への恐れ」であります。神を畏れることによって、人を恐れなくともよくなりますし、人を恐れると、神への畏れがなくなってしまいます。そこでイエス様は、死後のことを語ってくださいます。私たちが、まず気になければいけないのは、永遠に住む所です。神と共に住むのか、それとも神から離れた苦しみの所に住むのか？ということです。ゲヘナに投げ込む権威は神ご自身が持つておられます。

そして、この地上においても、主は安く売られている鳥のことを取り上げて、主が世話してくださっていることを話しておられます。ならばなおさらのこと、あなたがたは神の前に忘れられていないと言われます。ですから、神への畏れ、そして神が必ず自分を覚えておられる、見捨てられないというこの二つを覚える必要があります。

## 2B 聖霊による証言 8-12

8 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。9 しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。10 人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されません。11 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

イエス様がここで語られていることを整理します。弟子たちが、後にいろいろなところで、イエス様を約束のメシアとして宣べ伝えます。そして、人々の前でも証言しなければいけません。それが信仰や宣教のゆえに、捕えられて、宗教指導者や政治的権力者の前に立たなければいけないこともあります。その時に、人を恐れてはいけないという先のイエス様の言葉がとても大切になります。主は再び、人々の前でわたしを認めなさい、そうすれば終わりの時にあなたをわたしは御使いたちの前で認める、と言われます。そうでなければ、認められません。

そして、人を恐れず、主を畏れ敬う時にこそ、聖霊が何を語るべきか教えてくださるのです。しばしば思うことですが、なぜ、私たちは聖霊の満たしを受けることができないのか？それは、しばしば「恐れ」が心の中にあるからだと思います。聖霊の満たしに必要なのは、信仰のみです。けれども、恐れている時は信じていません。なので、聖霊の注ぎを受けることができないのです。

それから 10 節ですが、「聖霊を冒瀆する者は赦されません。」と言われたのは何か？と言いますと、群衆の中での、「悪霊どものかしらベルゼベルによって追い出しているのだ」というところをイエス様は意識しておられます。イエス様が、聖霊の力によってこそ、ご自身が神の御子であり、キリストであることが、反論できないかたちで現れました。ですから、イエス様に対して冒瀆しても、本当の意味でこの方を知っていなければ、それは赦されますが、疑いもなくこの方が神の御子であり、約束のメシアなのだということが明らかにされているのに拒むのですから、そこには罪の赦しが残されていません。そう言った意味で、聖霊に対する冒瀆は赦されないとされています。ここでも、聖霊の満たしがいかに大切かが分かります。私たちの証しは、聖霊によるものでなければ、力をもって伝わるものではないということです。

## 2A 財産との関わり 13-48

そこで群衆のほうから、声があがります。

### 1B 財産に対する心 13-34

#### 1C 貪欲への警戒 13-21

13 群衆の中の一人がイエスに言った。「先生。遺産を私と分けるように、私の兄弟に言ってくださ

い。」14 すると、イエスは彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停人に任命したのですか。」15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っていて、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

群衆のほうから、遺産相続のことを何とかしてほしいとイエス様に言ってきました。この人は、イエス様を尊敬するラビ、教師として見ていたようです。モーセの律法には、相続財産についての言い争いについてそれを調停する話も出て来ます(申命 21:15-17 等)。ラビは当時、そういった調停役も担ったのです。けれども、イエス様はそれを拒まれます。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停人に任命したのですか。」と言われます。分かり易く話すなら、「便利屋さん」にしようとしているのです。イエス様が 11 章で、群衆の数が増えてきた時に、「この時代は悪い時代です」と話し始められたことが、腑に落ちます。光が与えられているのに、そこに人々が来ません。けれども、自分の利益のために来ているのです。イエスを主として従っている弟子たちと、イエスを祭り上げるけれども、自分の益のために来ている群衆と別れています。

そこで、イエス様ははっきりと、「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。」と言われます。私たちは自分の生活でいろんなことが起こるのですが、その問題を解決しなければいけないと思いません。ここでは、兄が自分に相続の分け前をくれないという問題を解決したいと思いました。そんな中で私たちが置き去りにしてしまうことがあります。そう、「心」です。イエス様は、私たちにさえ取りあつかえない「心」を浮き彫りにします。主が来られたのはこのためであり、福音の真理は、私たちの隠れたところを、神が裁かれるというところに基づくからです。そして、パリサイ派は 16 章 14 節に「金銭を好むパリサイ人たち」とあります。ここにも偽善がありました、富を持つことが神の祝福の現れとしながら、そうした貪欲について心に秘めていたのです。

15 節の、「その人のいのちは財産にあるのではない」という、「いのち」はゾーエというギリシア語になっています。これは霊的な命のことです。後で、「たましい」と訳されているものが出て来ますが、それは「プシュケー」であります。精神的、肉体的な命のことです。私たちのゾーエは、財産にあるのではない、とのことです。私たちは、とにかく自分の持っている物によって自分の価値、命が決まるということをしてしまいがちです。そして、たましいは多くの財産があれば安心します。しかし、霊のいのちはそこにはありません。

16 それからイエスは人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。17 彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』18 そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。19 そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。」20 しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』21

自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

ここでこの金持ちが抱いた貪欲を考えていたいと思います。ここで彼が豊作の結果、それを貯めていたことそのものが非難されているわけではありません。そうではなく、そこに神が全く介在していないことが問題なのです。ここに、「私が、私の」と連続して出てきているのを見て下さい。主が祝福してくださった、全く神の憐れみによる、と告白していません。また、主の御心であるならば、これは取られる。主は与え、主は取られるという告白とは真逆です。ヨブは富んでいましたが、そのような姿勢でした。ここに貪欲の根があります。

そして、主によって与えられた財を自分のためだけにそれを使おうとしています。いのちは神のうちにあるのに、それを財によって満たそうとしています。ここにも貪欲の理由になっています。神によってのみ与えられる霊のいのちが、財産が多くあって安心することにあると思ったことが間違っています。主は経済的にも祝福してくださる方です。けれども、それを御国のために投資していく、つまり、その金を使っていくことが目的です。貧しい人たちに施しをすることも、御国のために用いることです。また、弟子たちを助けること、つまり福音宣教のために使うことも御国のために用いることです。

## 2C 御国の生き方 22-34

### 1D 必要を知っておられる主 22-30

22 それからイエスは弟子たちに言われた。「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようかと、いのちのことで心配したり、何を着ようかと、からだのことで心配したりするのはやめなさい。23 いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものだからです。

群衆に対しては貪欲の問題について話されましたが、弟子たちに対しては、心配という問題について話されました。イエスを自分の主として生きるということは、財産について世の考えと真逆です。世は、自分のいのちは財産にあると思って生きています。けれども、霊のいのちは神のみにあると知って、弟子たちは生きています。ですから、財産については、もっぱら神が備えてくださると信じているのです。「日々の糧を与えてください。」と祈るとおりです。働くな、と言っているのではありません。むしろ逆です、働かない者は食べてはいけない、と教えています。けれども、主が必ず備えてくださると信じるのです。

心配するというのは、必要以上に気を使うことです。どちらが大事なのか？と冷静に考えれば、食べ物はいのちのためであるのであり、食べ物のためであるわけではありません。着る物もからだのためであるのであり、からだに着る物のためであるわけではありません。ところがそれが本末転倒になって、着る物、食べ物のほうにもっと気を使っているのです。私たちはいつも、この優先順位の混乱の過ちを犯します。着る物を求める、食べ物を求めるのは良いことです。けれども、いつ



の間にかそれが第一のことになって、何のための着る物なのか食べ物なのか忘れてしまいます。

24 鳥のことをよく考えなさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉ありません。それでも、神は養ってくださいます。あなたがたには、その鳥よりも、どんなに大きな価値があることでしょう。25 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。26 こんな小さなことさえできないのなら、なぜほかのことまで心配するのですか。

イエス様は、「よく考えなさい」と言われています。私たちは、しばしばよく考えるのを放棄しています。「そんな心配するなって、あなたはずいぶん、無責任ですね。自分のことでないから、そんな気楽でいられるのでしょうか。」と言うのですが、実はよく考えていないのは本人なのです。よく考えれば、種蒔き、刈り入れ、納屋や倉もないのに、それでも生きている鳥がいます。なぜ？神が養われているからです。私たちの周りには、このようによく考えれば、神が備え、神が養い、神が祝福してくださっているのを見ることができます。できないのは、立ち止まって考えていないからです。

27 草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装ってはいませんでした。28 今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、どんなに良くしてくださることでしょう。信仰の薄い人たちよ。

鳥については、食べることについて心配していることに反対する例でしたが、ここの草花は着る物について心配していることに反対する例です。ソロモンが栄華を極めていたのは、列王記第一に書いてあります。けれども、自然にある野の花を見れば、どれだけの美しさがあるのでしょうか？ここのよく考える必要があるのです。星野富弘さんの詩を見れば、花には小宇宙のような世界が広がっていることが分かります。そして、鳥についても、花についても、弟子たちと比べておられません。はるかに人間の方が、価値があるのです。

29 何を食べたらいいか、何を飲んだらいいかと、心配するのをやめ、気をもむのをやめなさい。30 これらのものはすべて、この世の異邦人が切に求めているものです。これらのものがあなたがたに必要であることは、あなたがたの父が知っておられます。

世の異邦人とありますが、天地を造られた神がいることを知らない人たちということです。神がおられることを知らないの、自分で何とかしないとイケないと思うから、心配し、気をもみます。日本は、創造主を知らない人々が大半です。だから、「心配する」ということで成り立ってるとも言えます。神が完全であるのに、自分たちで完全になろうと努力します。けれども、それができないので気をもみます。しかし、父がおられます。父親は子を養うものです。天の父は、私たちを養ってくださいます。私たちがキリストの弟子として生きるなら、心配することによって成り立っている社会に

対抗するようにして生きることになります。抵抗していますか？父の養いを信じていますか？

## 2D 財産による施し 31-34

31 むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。32 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。33 自分の財産を売って施しをなさい。自分のために、天に、すり切れない財布を作り、尽きることのない宝を積みなさい。天では盗人が近寄ることも、虫が食い荒らすこともありません。34 あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあるのです。

迫害される時もそうでしたが、地上にいる時は神が守ってくださいます。ですから、これらのことは神に任せて、私たちが求めるものは御国だということです。ここでイエス様が励ましを与えられます。「小さな群れよ、恐れることはありません。」群衆が大勢いる中で、弟子として召されて、従っているのは少数派です。小さい群れなので、どうしても自分は少数派で、世に対して何の影響力もないどころか、世に潰されてしまうのではないか？という劣等感というか、被害意識を持ちます。これは良くないことです。「あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。」と言われるのです。どんなに小さい群れであっても、主はこれらの国々を凌駕する、ご自分の国を私たちに下さるのです。

ですから、私たちの財産に対する態度は、ここでイエス様が言われたとおりでなければいけません。それは、自分の食べる物、着る物を心配しないだけでなく、自分が労して得たものを、他の人々に施すのです。「エペ 4:28 むしろ困っている人に分け与えるため、自分の手で正しい仕事をし、労苦して働きなさい。」自分のことでも大変なのに、どうして！と思いますが、それはまだ少数派としての負け犬根性があるからです。私たちは、総理大臣にも、億万長者番付に入っている金持ちの前でも、堂々として、キリストを伝えることのできる地位と使命が与えられています。御国が与えられているのですから。ですから、自分の持っているお金をどうやって守るか？ということも大事ですが、それ以上に、自分の持っているお金をどうやって使うか？ということに気を使っていく必要があります。

そしてイエス様は、与えれば、与えられるという原理を教えておられます。与えれば、御国において与えられます。天に宝を積むのです。

## 2B 給仕の心 35-48

そしてイエス様は、この地上にある財産を使って、御国のために生きていくことを、「主人に仕える僕」として語っていかれます。今、群衆はイエスを担ぎ上げて、王にでもしようという気持ちがあったでしょう。それはしかし、自分たちの利己的な思いで祭り上げたかっただけです。その中で、ご自分に従う者たちに、確かに戻って来てくださり、その時に報いを与えられることをイエス様は教え

ておられます。主が教会のために戻って来てくださった後、主がそれぞれに報酬を与えられます。

### 1C 目を覚ます 35-40

35 腰に帯を締め、明かりをともしいなさい。36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸を開けようと、その帰りを待っている人たちのようでありなさい。37 帰って来た主人に、目を覚ましているのを見てもらえるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに言います。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばに来て給仕してくれます。

腰に帯を締めることは、給仕をする時に動きやすくするために腰の裾を上げることであります。そして、明かりを灯すのはもちろん部屋を明るくしておくことです。主人が婚礼から帰ってきます。その婚礼は何日も続き、一週間になることもあります。いつか分からないのですが、主人が帰って来たらいつでも用意できているようにするのです。つまり、私たちはいつでも、主が戻ってこられることを期待して待ち望んでいるということです。そしてすごいことが書いてあります。主人のほうで給仕をしてくれるということです。これはどういうことか？イエス様が、私たちが神の御国に入れれば、私たちが御国の祝宴に招いてくださるということです。

38 主人が真夜中に帰って来ても、夜明けに帰って来ても、そのようにしているのを見てもらえるなら、そのしもべたちは幸いです。39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、泥棒の来る時間を知っていたら、自分の家に押し入るのを許さないでしょう。40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのです。」

ここの喩えには、この世が暗くなるということがあります。イエス様が十字架に向かわれる道においても、光のところに来ないという悪い時代でありました。そのような時に眠ってしまう誘惑があります。主に仕えていても、特に何か変わるものではない。けれども、世と同じように生きていようとします。そうすると、見えるものが見えなくなります。自分がどのような状態か分からなくなります。ペテロが後にそうなるように、自分は死ぬまで共にいますと言いながら、イエス様を三度も否むようなことが起こります。だから、状況が自分に不利であっても、それでもきちんと主に従っているのです。「ローマ 13:12 夜は深まり、昼は近づいて来ました。ですから私たちは、闇のわざを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けようではありませんか。」

### 2C 忠実に仕える 41-48

41 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえを話されたのは私たちのためですか、皆のためですか。」

イエス様がある時には群衆に、ある時には弟子たちに語られるので、今のはどちらに語られているのか？と尋ねています。これは弟子たちに対するものでしたが、彼らは後に教会の指導者にな



っていきます。そのことも念頭に置きながら、さらにこの譬えを彼らに合わせたものに変えます。

42 主は言われた。「では、主人によって、その家の召使いたちの上に任命され、食事時には彼らに決められた分を与える、忠実で賢い管理人とは、いったいどれでしょうか。43 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。44 まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せるようになります。

僕といっても管理者としての僕です。食事を与える僕ですから、これは霊の糧を人々に与える奉仕にあずかることです。これをいつもきちんと与えている時に、主人に気に入られるのです。ですから、なおのこと牧者や教師、その他、日曜学校で教えている先生、小さな交わりで御言葉を分かち合うことを導いている人々、あるいはある人を弟子にするために時間を費やし、祈っている人もいることでしょう。大事なものは、いつでも同じように養っていることなのです。忠実であるということです。パウロが牧者であるテモテにこう指導しました。「Ⅰテモ 4:15-16 これらのことに心を砕き、ひたすら励みなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。働きをあくまでも続けなさい。そうすれば、自分自身と、あなたの教えを聞く人たちとを、救うことになるのです。」

45 もし、そのしもべが心の中で、『主人の帰りは遅くなる』と思い、男女の召使いたちを打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めるなら、46 そのしもべの主人は、予期していない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ報いを与えます。

ここでの問題は、「主人の帰りは遅くなる。」と心で思うことです。主が戻って来られることを、心の中から締め出してしまうことです。そうすると、私たちの主への奉仕はいいかげんになります。自分に任されたことに、忠実でなくなります。自分のやりたいようにやってしまいます。ですから、どれだけイエス様がすぐにでも戻ってこられるということが、大事かを思わされます。

47 主人の思いを知りながら用意もせず、その思いどおりに働きもしなかったしもべは、むちでひどく打たれます。48 しかし、主人の思いを知らずにいて、むち打たれるに値することをしたしもべは、少ししか打たれません。多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。

ここですね、ペテロが質問したので、イエス様がここで語られています。ペテロの頭には、群衆は知らないが私たちは知っているから大丈夫だという安心感が少なからずあったことでしょう。私たちも、教会に来ているから、来ていない人たちとは違って安心だということがあるかもしれませんが、けれども、実は反対です。知らないで主のために生きなかった人は、少しだけ叩かれますが、知っていて応答しなければ、多く叩かれます。多くを任された者がさらに要求されるのです。